

発達障害のある子どもへの支援について

近年、発達障害の子どもたちについては、何らかの理由から脳のある部分がうまく機能していないということが分かってきました。その結果子どもたちには、様々な場面で「うまくいかない状況」が生じています。

ここでは、その「うまくいかない状況」を「行動」「学び方」「感覚」の三つに整理し、表れと支援の例を紹介します。

1 行 動



「行動」面の「うまくいかない状況」としては、「多動・衝動性」「注意集中の難しさ」といった表れが多く見られます。

うまくいかない状況	支援の例
<ul style="list-style-type: none"> ・落ち着きがなく、座ってられない。 ・一つのことに集中できない。 ・色々な物事に次々と反応してしまう。 ・即座に反応してしまう。 ・ボーっとしてしまう。 ・片付けができない。すぐに物をなくす。忘れ物が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・環境調整（刺激を精選する） 目：視界に刺激になるものを置かない。（物、掲示物など） 取り組むべきものだけが目に入るようにする。 耳：耳障りな音や特定の音が気になるときは、音源から遠ざける。 あれこれ、長々と言って聞かせない。（伝えるときは端的に3つくらいまで） ・何をどこに入れるのかが分かりやすい整理法、目に入る所に注意を促すメモを貼る等。

2 学 び 方



「学び方」としては、情報（音声や文字など）の入力、処理、出力に「うまくいかない状況」が生じ、その結果、読み、書き、算数、推量等を行うときにつまずきが見られます。

うまくいかない状況	支援の例
<ul style="list-style-type: none"> ・記憶できる情報の数が少なく、記憶してられる時間が短い。思考中一時的に覚えておくことが難しい。 ・抽象的な世界、見えないものが分からない。（感情、場の雰囲気） ・推測することが苦手。 →見通しが持てない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・視覚的な提示。（見て、一目で分かるように） 具体物を操作しながら考えたり理解したりできるようにする。 ・構造化（場所、時間、手順） 場所：集中しやすく、目的の分かりやすい場を作る。 時間：スケジュールを提示する。 例：1「 」、2「 」、3「 」 見通しの長さに合わせて。 ◇スケジュールは、本人が強く不安を感じる部分を丁寧に作る。 ◇いつもと違うときには必ず提示する。 ◇進行（終わり）が分かるように。 手順：「時間」と同じ構造化の仕方です。



あひなろ

<ul style="list-style-type: none"> ・文や文字の読み書きや意味理解が難しい。 例：◇文字と音が結びつかない。 ◇文を見ると文字の羅列に見えてしまう。(単語のまとまりが見いだせず、意味が分からない。) ◇単語はたくさん知っているが、つなげて文章にできない。 ◇田の字を見て、小さな口を4つ書いてしまう。 ・量の概念の難しさ。 例：かけ算九九はすらすら言えるのに3の塊が3つで9だとは分からない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「分かり方」を知り、それに応じた工夫を行う。(※注1) →回数を重ねれば誰でもできるようになるわけではない。 ・指を使って数える、動作化して理解する、スリットを使用して必要部分だけ見えるようにする、単語を囲んでまとまりが分かりやすいようにする、等
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

※注1 分かり方に応じた工夫

検査結果や日頃の様子から、その子の得意な(優位な)「分かり方」を推測し、得意な「分かり方」を生かして課題を行えるように支援します。(以下、支援例)

- 視覚映像優位 例：文の理解 挿絵をつけて意味を理解しながら読むようにする。
- 聴覚言語優位 例：文の理解 始めに支援者が読み、聞かせるようにする。
- 同時処理優位 例：時間の経過をとらえる 時計の絵を用いて時間を塊として示すようにする。
- 継次処理優位 例：時間の経過をとらえる 模型の時計を用いて順番に目盛りを数えながら理解できるようにする。または、模型を手順表(「①時計の針を合わせる、②長針を右に動かす。時間は1周、分は1目盛り、③時刻を読む」等)に従って操作し、理解できるようにする。

- ・「こういうやり方をしたら分かりやすかった。」「解決できた。」という経験をたくさん重ねることができるように工夫します。
- ・子どもが、自分自身が持っている力の使い方に気付くことができるようにし、学業不振による自己評価の低下を予防することが大切です。



3 感覚

周囲からは「わがまま」「神経質」と思われている場合や、辛い感覚を回避しようとする余り不適切とみなされる行動をとってしまったりする場面が多く見られます。

うまくいかない状況	支援の考え方
<ul style="list-style-type: none"> ・味に過敏(極端に偏食)、においに過敏。 ・皮膚感覚が過敏。(暑さ寒さに弱い) ・音が苦手。(全部同じ音に聞こえる、高い音・大きい音にパニック) ・変化に弱い。(分からないことへの極度の不安から同じであることに固執する場合も) →「常同行動」やこだわり。 	<ul style="list-style-type: none"> ・不快な刺激を軽減する。 ・寒暖に弱いときは、活動場所に配慮し、衣服の調節や水分補給を教える。 ・落ち着いた声で穏やかに話しかける。突然話しかけたりしない。 ・あらかじめ伝えたり理由や原因を分かりやすく伝えたりする。(分かると耐えられる)

4 関わるときのポイント



ここまでで紹介してきた「うまくいかない状況」を踏まえた、関わる時のポイントです。

- ☆ ×ではなく○を伝える。（肯定的な伝え方をする。）
 - 「席を立ててはいけません」 → 「座りましょう」
 - 「横入りしてはいけません」 → 「ここで待ちましょう。」 「この人の次です。」
 - ・「～してはいけない」という言い方では、「～」が先に頭に入って強く印象に残り、逆に禁止されたことを行ってしまうこともあります。
- ☆ 耳からが苦手なら目から伝える。（聞き取ることが苦手なら見せて伝える。）
 - ・伝えたいことは書いて（描いて）示します。（行き先、持ち物、約束、段取り、見通し等）
 - ・話し言葉は言ったそばから消えていくので残りません。また、話し言葉は「音（声）」に注意を向けないと入ってきません。記憶に問題がある、「音」情報の処理が苦手、注意を向けることが苦手、興奮しやすく頭に入らない、といった事情から、話し言葉は伝わりにくいことが多々あります。
- ☆ 一度に伝えるのは一つ～三つ。
 - ・記憶の容量の関係からです。また、端的に話すことも大切です。
- ☆ 先回りと予告。
 - ・本人が自分のやりたいことに入り込もうとするのが分かっていたら、入り込む前に（先回り）、「何を」「どれだけ」やったら「それをやって良い」と提示する（予告）と、集団のルールに従って行動できる力につながります。
- ☆ 具体的に褒める。
 - 「素晴らしい」 → 「○○ができましたね！」「□□を～回やれましたね！」
 - ・できたことが具体的に実感でき、またやってみようという意欲につながります。
- ☆ 当たり前でできること、やって当たり前のことも時々さりげなく褒める。
 - ・本人とのラポートがとれやすくなります。叱責が多い雰囲気から褒めることが多い雰囲気に切り替えることにもつながります。また、周囲にはできて当然のように見えることでも、実は本人がとてものがんばってできたことである場合もあります。（ただし、賞賛が効果的である児童かどうかの見極めも必要です。）
- ☆ 「分かっていないのかもしれない。」という見方を常に念頭に。
 - ・発達障害の子どもは、「分かる」ことをつまずきから問題行動を起こしている場合が多くあります。ルールが守れなかったり暴れてしまったりしている場面でも、ごく簡単なことが理解できていないことから始まっていたりします。
- ☆ こちらの「つもり」は、相手の「つもり」でないことが多い。
 - ・大人が「言ったつもり」でも正しい意味が理解できていなかったり、「配慮して負荷を減らしたつもり」でも本人にはそうは感じられていなかったりすることがよくあります。子どもに何か投げ掛けたときには、それをどう受け止めたのかまで見届けることが必要です。



Q1 わがままなのか、障害なのか、判断に迷うのですが。

A 正しく見極める方法はありません。どちらであるのかという答えもありません。どちらであるのかを考えるよりも、

①「その集団の中で、どこまでが許されるのか」ということから基準をつくる

②その基準に従って生活できるような支援の方法を考える

という姿勢で臨むのが一般的です。

Q2 感覚過敏や「生理的な弱さ」についての理解と対応を教えてください。

A 発達障害の人の中には、感覚に偏りがあり、他の人に比べて過敏であったり鈍感であったりする人がいます。また、のどが渇きやすい、疲れやすいなど「生理的な弱さ」を持っている場合もあります。これらは、中枢神経系の働きからくるものと言われています。感覚の偏りは、知的な問題に関係なくあるようです。

具体的な感覚過敏の例を以下に示しました。

音：特定の音に反応する、特定の人の声を苦手とする、音楽の授業が苦手…等

味：好き嫌い、では片づけられない、いかんともしがたい耐え難さを感じる。

温度：体温調節ができない人が多く、暑さ寒さに弱い。疲れやすかったり、のどが渇きやすかったりするのもそのためであると言われている。

姿勢：保持するのが苦手です。「良い姿勢」で立っていたり、座り続けていたりするのが苦手で、集会で寝ころんだり、授業中机に伏せたりするのもそのためであることが多い。

感覚過敏に対する対応は、担任や学級集団に対して「了解をとれば本人の負担が軽減されるようにする」のが一般的です。

「勝手に自分が好きなようにしている」という状態にしておくのではなく、

① 苦手な部分を自覚できるようにする

② 苦手さや辛さを言葉で伝えることができるようにする

③ 伝えた結果、軽減できたり回避できたりする経験を重ね、周囲とやりとりをして折り合いをつけるというスキルを身に付ける

という段階で指導を行い、それができる環境を整えることが大切です。

伝えれば理解してもらえると環境の中で、安心して生活できるようにすることが一番の対応です。

【引用・参考文献】

「発達障害の子どもたち」杉山登志郎 講談社現代新書 2007

「通常の学級におけるAD/HDの指導」全国情緒障害教育研究会編 日本文化科学社 2003

「AD/HDのすべてがわかる本」市川宏伸 講談社 2006

「『脳科学』の壁」榊原洋一 講談社 2009

「脳科学と発達障害」榊原洋一 中央法規 2007

「発達が気になる子のサポート入門」阿部利彦氏 学研新書

「長所活用型指導で子供が変わる」藤田和弘／熊谷恵子・青山真二編著 図書文化 2000